



「花組」と「星組」―飛鳥寺の瓦―

飛鳥寺の造営に際して、587年に百済から四人の瓦博士が渡来したことが知られています。彼らが製作、あるいは製作の指導をした蓮華文軒丸瓦には、大きく2つの種類があります。ひとつは素弁十弁で、蓮弁端の反転を短い切れ込みで表現したもので、中金堂など伽藍中枢部から主に出土します。もうひとつは十一弁で、蓮弁が角張り、弁端の反転を丸い点珠によって表現したもので、中門や回廊から多く出土します。両者には、瓦当裏面の調整や丸瓦と瓦当の接合の仕方などにも、違いが認められます。瓦の研究者は前者を「花組」、後者を「星組」と呼んでいます。

実は、この「花組」・「星組」に対応して、丸・平瓦も二種類に分けることができます。「花組」の丸・平瓦は、赤褐色や暗褐色をしたものが主体を占め、丸瓦は玉縁部を持たない行基式です。一方、「星組」の丸・平瓦は暗灰色や灰色をしたもので、丸瓦は玉縁式です。やはり、両者には厚さや側面の加工、凸面の仕上げ方などに違いが認められます。

渡来した四人の瓦博士は、当時の百済の都、扶余^{フソ}で瓦製作に携わっていたと考えられます。飛鳥寺の瓦が文様、色調、製作技法から大きく二群に分かれることは、百済の扶余から渡来した瓦博士の技術に二つの流派があったことを示しているといえます。

(都城発掘調査部 高田 貫太)



飛鳥寺の瓦（左：花組 右：星組）